

クララ様はサディストである

黒ハム

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

倉掛クララ。

「イナズマイレブン2 脅威の侵略者」で登場。エイリア学園のマスターランクチーム、ダイヤモンドダスト所属の女性選手である。また「アレスの天秤」では永世学園のメンバーとして登場を果たした選手である。

そんな彼女だが、実はサディストである。大事なことなので二度言おう。ドSである。

これはそんな彼女のありふれた(?) 日常の恋愛(?) 物語である。

※注意事項。

下記に承諾された方のみお読みください。

- ・アレスルートです。
- ・色々とカットしています（もしかしたら書くかもしれない）
- ・キャラの過去捏造、キャラ崩壊などを含みます。
- ・サッカーはします。
- ・作者のノリで書いています、色々と期待しないでください。
- ・新たな性癖に目覚めても作者は一切責任を負いません。
- ・閲覧するときは心の準備をしてください。

目次

プロローグ	1
こうして私はサデリストに	5
雷門VSバルセロナ・オーブ	12
サッカー強化委員	21
剣人の選ぶ道	26
感動の再会（つぽい何か）	31
弱みを握るために	39

プロローグ

『では本日は昨日のフットボールフロンティア決勝戦で活躍した雷門中。その中の特に4名にインタビューしていこうと思います』

テレビではアナウンサーの人が雷門中に行って、インタビューを行うようだ。と言っても生放送じゃないので色々と情報は流れていたが。

フットボールフロンティア。中学サッカー界の日本一を決める、大きな大会だ。

サッカーというスポーツは日本中いや世界中から注目を集めるこの時代。中学生の大会と言えどその注目度は計り知れない。

優勝校は当然注目を浴びる。先日……正確には先週行われた決勝戦から一週間が経ってもその熱はとどまることを知らず、新聞、雑誌、テレビなど多くのメディアが彼らを注目する。

『本日はお願いしますね。では、まず簡単に自己紹介をどうぞ』

そして、インタビュウを受けている四人というのは、雷門中を優勝に導いた大きな貢献者と言ってもいい。

『雷門中1年。夜桜^{よさくら}剣人^{けんじん}です。リベロをやっています』

「おい皆！剣人が映ったぞー！」

剣人が映ると同時に私たちのテンションは上がっていく。

私たちは永世学園に通っている仲間。ただ、ここにいる仲間は中学校が一緒というだけではない。お日さま園という孤児院出身で小学校も一緒。中学校からは私たちお日さま園出身者用の寮みたいな感じのところに住んでいる。

今映っていた剣人もお日さま園出身。だけど、小学校に上がると同時に引き取り手が見つかって私たちと離れ離れになってしまった。

この前……といってもだいたいぶ前だけど、フットボールフロンティアの本戦開会式で剣人を見つけ、お父様にも確認したけど本人だった。そこで再会したけどまた離れ離れになってしまった。

「凄いね彼は。気付けば遠い存在に見えるよ」

基山タツヤ。私たちの代の言わばリーダー的な存在。

「だよな！俺たちもいつかあんな風になりたいな！」

緑川リュウジ。明るいタイプで、なんかよく諺を使う節がある。

「あの、フットボールフロンティア決勝大会ごっこを実現するとは……やるな」

砂木沼治。歳上。子供っぽいところがある。

「あなたのあれに、剣人は参加していなかったはずよ」

八神玲名。同じ年なのに歳上に見える。お姉さんの存在。後、私より胸が大きくてスタイルがいい。

「剣人かあ……今度勝負してえな」

南雲晴矢。熱い。頭にチューリップが咲いてる。

「私もだ。まあ、勝負ができればだが」

涼野風介。クール。だけど私服がダサイ。

今思うと結構な人数がテレビに釘付け。さすがにリビングにこれだけ集まると狭い。

『そうですね。じゃあ、まずは貴方のサッカーを始めたきっかけは何ですか？まずは夜桜君』

『オレは友達ですかね。周りにいた奴らが誘ってくれて一緒にやり始めました』

『なるほど……ちなみにそのお友達と今は？』

『オレが引越してしまつて、中々会えていませんね。今度会つたら一緒にサッカーしたいなつて思います』

笑顔で対応しているあたり慣れているのかな？一緒にいる豪炎寺さんや鬼道さんも落ち着いているし……ああ、でも円堂さんだけは固まっっているようだけど。

「……………そうじゃない」

「ん？何か言った？クララ」

「……………特に何も言つてないよ」

「そう？」

私が見たいのは剣人のあんな格好良く爽やかにインタビューに出来る姿じゃない。

もつと、オドオドとした可愛らしくひ弱な小動物みたいな姿だ。

何のために録画していると思ってるの？確かに、今見れていない子たちにも共有するという目的は1割くらいある。でも残りの9割はそれをネタに散々いじることだ。いじり倒すことだ。

「なあ、風介」

「なんだ晴矢」

「クララの奴、すごい不機嫌じゃないか？」

「触らぬ神に祟りなしだぞ」

「???アイツが好きな剣人が出ているのに不機嫌だぞ？変じゃないか？」

「やめておけ。それ以上踏み込むと殺されるぞ」

あそこでなにやら小声で話していますね……全部聞こえているけど。

ふふっ。どうやらあの二人とは後でオハナシする必要があるみたいで。

『じゃあ、そろそろ最後の質問ですね』

気付けば最後の質問になった。途中で好きな動物やら何か色んな話が出たけどつまらなかった。

恋愛関係も出たけど至って普通に伝えてたからネタにできない。頬を真っ赤にして湯気が出そうな感じで伝えてくれたら最高にそのるのに淡々と応えていて本当につまらない。

『今の皆さんの目標は何でしょうか？』

『世界です！』

『世界……ですか？』

『はい！日本だけじゃなくて世界のすごい奴らとも戦いたいです！』

円堂さんの言葉に三人もうなずいている。

「世界……か」

剣人が一層遠い存在に感じてしまう。世界を目指す剣人に対して私たちはサッカー部すらない。ただのサッカー好きどまりの存在なのだから。

『これで、インタビューを終わります。四人とも今日はありがとね』
そしてテレビの方はニュースに切り替わった。

「ちよつとボール蹴ってくる」

「あ、俺も行く！」

治の一言にリュウジをはじめとした面々が外へと駆け出す。

「暗いんだから気をつけろよ」

「分かっているって！」

……はあ。何というか……。

「……退屈」

とりあえず、あの二人とオハナシして気分を変えよう。

ちなみにクララとオハナシした二人が数日間、クララを見るたびに恐怖がフラッシュバックしたのはまた別のお話。

こうして私はサゲイストに

私は感情を表に出すのが苦手だった。

嬉しいときも悲しいときもあまり表に——感情に出ることはなかった。

「今日から皆さんと一緒に暮らす倉掛クララちゃんです」

「……お願いします」

あまり喋るのも得意じゃないし、好きじゃない。

だから両親からも静かで無愛想な私を気味悪く扱っていた。

そんな両親が私を捨てたということに対して、私は特に何も思わなかった。普通の子供なら泣きじゃくるかもしれないけど一切泣かなかった。心の中でも淋しいとか思わなかった。だって、両親に対して、何の感情も抱けていなかったからだ。

何日か経つても私は皆となじめないでいた。最低限の会話は出来る。でもそれ以上に会話が広がらないのだ。向こうも……というより、ここにいる子たちは全員が全員、両親に捨てられたか両親をなくしてしまった子たち。私のようにではないが、そのショックやらで静かになる子や塞ぎ込む子は珍しくない。唯一違うのは、そういう子たちは段々と明るさを取り戻して本来の性格とかになるが私に関して言えばこれが素。だから、変わりようがないのだ。

「………はあ」

でも、私だって皆と遊びたくないわけじゃない。別にここにいるのが嫌ってわけじゃない。ただなじめない。馴染む方法を私は知らない。

「ねえねえ」

だから私は大抵一人でいる。一人でブランコに乗りながら皆が遊ぶのを見ている。

そんな時、一人の男の子が話しかけてきた。

「……なに？」

最近……というかお父様はサッカーが好きらしい。サッカーボールをいくつか私たちに使えるよう与えてくれた。だから、皆ボールを

蹴って遊んでいる。

「何で一緒に遊ばないの？」

その子はすごく不思議そうな眼を向けてくる。

「……私と遊んでもつまらないよ」

本当は遊びたい。でも、きつとつまらなくなって私を捨てる。そうに決まっている。だから私は――

「そんなことないよ！」

――否定したかった。でも、不思議と彼の瞳を見ると彼なら受け入れてくれるかもしれないと思った。根拠はない。根拠はないけど……

「……いいの？」

「もちろん！」

彼なら大丈夫。少なくとも両親とは違い私を受け入れてくれると思った。

夜桜剣人。それが彼の名前だった。

彼は両親を亡くした側の子どもだった。しかも、両親が目の前で死んだらしい。その事を聞いたのは仲良く……というより、一緒に遊び始めてから少し経ってから知った。

彼に比べると私はまだ可愛い方だ。一応両親は存在している。で

も、彼の場合はこの世からいない。

「……どうして私に声をかけたの？」

一度だけそんな質問をしたことがある。

「似ていたからかな」

彼は頬をかきながらそう答えた。

「……誰と？」

「僕と」

彼もここに来たときは独りでずっと閉じこもっていたらしい。彼の場合は仕方ないだろう。でも、それを皆が助けてくれたそうさ。皆がサツカーと一緒にやろうと誘ってくれたおかげで変わったそうさ。それを言うなら私もだ。ここにいる皆は私を受け入れてくれた。こんな私でも受け入れてくれた。受け入れてくれると知っていたから剣人は声をかけてくれた。

彼は優しい人だ。でも、それは皆にも優しい。だから少しだけ私は

「……ねえ剣人くん」

「なに？」

「……ずっと一緒にいてくれる？」

——私は彼に自分だけを見てほしかった。可愛く言うならちよつとしたワガママ。醜く言うなら独占欲。

彼は私を救ってくれた王子様のような存在。だから、私と一緒にいてほしかった。他の人たちと過ごす時間より長く過ごしたかった。

「もちろん！」

彼は笑顔で応えてくれた。その時の私は満足していた。だって、こんな私を知っても離れず、ずっといてくれた存在は初めてだったから。

「……指切りしよっ！」

「いっよ」

私と彼の小指が結ばれほどける。私はそんな幸せな時間がずっと続くと思っていた。

でも、どんな時間にも終わりがあつた。そう知ってしまうのだった。

「……どうしたの？」

ある年の3月。もうすぐ私たちが小学校に上がるそんな時期。ここにいる皆は同じ小学校に入学するから離れ離れにならない。帰る場所もここだから、学校という場所にワクワクさを覚え始めたそんな時。

彼は一人、建物の陰で泣いていた。

さつきお父様に呼ばれて、それからここに向かって走るのがたまたま見えた。

「……何かあったの？」

私は彼の泣く姿を見るのは初めてだった。泣いている彼は一言、「なんでもないよ」

精一杯の笑顔でそう応えてくれた。

心配させまいと笑顔を作ってくれた。でも、私からしたらただ辛いのをぐまかそうとしているようにしか見えなかった。

「大丈夫だよ」

「……そうなの？」

「うんーさあ遊ぼうよ！今日は何する？」

私はもう一歩踏み込むことが出来なかった。直感的に踏み込んではいけないと思ったからだ。

その日から彼は皆と一層仲良く遊んでいた。何でもなかったんだと私は思った。……そんなわけはないのに。

そして私が彼の涙の訳を知るのはそう遠くなかった。

4月。それは小学校入学式の前日だった。

「……先生」

「なにかな？」

私は違和感を感じていた。

剣人がいないのだ。

朝から探しているがどこにもいない。

「剣人くんは？」

「……」

先生は笑顔のまま固まってしまった。きつとどろろという風に言おうか悩んでいるのだろう。

「剣人くんはね。もうここにはいないの」

そして目線を合わせて言ってくれた一言。私はそれを――

「……え？」

――受け入れられなかった。受け入れられなかった。

「あの子はね。親戚の人が引き取るって言ってもうここにはいないの」

でも、その言葉を、現実を受け入れざるを得ない。

「うう……」

「クララちゃん……よしよし。悲しいよね。いきなりお別れだなんて」

「うわあああああああん」

初めて大声を上げて泣いた。その現実を前にして泣くことしか出来なかった。

後に知ったが彼はその話の途中に飛び出したそうだ。

あの時泣いていたのは私たちとお別れが来ることを知っていたから。

それから一ヶ月間、彼は悔いが残らないよう目一杯遊んでいた。

そして、私たちに何も言うことなく煙のように消えてしまったのだ。

「……はあ」

昼休み。外を眺めながら一人食事を取る。

教室では雷門中サッカー部の中で誰が格好いいかという話で持ち切り。名前が挙がるのは風丸さんとか一ノ瀬さん、後、豪炎寺さんに

「……剣人も」

すごい人気だ。後の人たちは人によるって感じだが。

私は剣人と別れてから少しずつ変わった。

一つは私は彼が好きだということ。もちろん like ではなく love の方で。

そして、

「……もう一度見たいなあ……」

剣人の泣き顔。今思い返してみると凄い……興奮する。

他の人が泣いたり心が折れた姿を見たけれど、どれも剣人に勝るものはない。どれも私を楽しませる程度だ。

でも、剣人だけは別。幼い頃の彼であの破壊力だったんだ。きっと、成長した爽やかな彼が泣きじやくる姿なんて……ああ。想像しただけでもうヤバイ。心が折られ失意の目で見られたら私は幸せすぎで死んでしまうのではないか？そんな風にさえ思わせる。

「……ふふっ」

早く会いたいな。会って沢山話して、たくさん屈辱的そうな顔を私だけに見せてほしいな。

そんな彼女の——少なくとも純粹に会いたいという——願いが叶うのは少し先の話である。

雷門VSバルセロナ・オーブ

オレたち雷門中がフットボールフロンティアを優勝してから月日が流れた。

『遂にこの日がやって来ました！日本とスペインの親善な意味を持つた記念すべき試合です！』

優勝したあの日。響木監督からオレ、円堂さん、鬼道さん、豪炎寺さんの4人に対し、他国のチームと試合をしたくはないか？という提案があった。

当然答えは決まっている。YES以外にはあり得なかった。

相手はスペインの少年リーグで優勝したバルセロナ・オーブ。大してこちらは雷門中イレブン。日本中が注目しているこの試合。会場内も熱気に溢れ、またテレビ中継用のカメラが何台もある。

『円堂！円堂！円堂！』

「おーい！」

凄い円堂コールだなあ……さすがキャプテン。

『おお。雷門のキャプテン円堂守が大きく手を振っています。日本のサポーターは大興奮だ。今や伝説の男、円堂守が日本を代表して世界の強豪と戦うぞ！』

生きている伝説になっちゃったよ……ウチのキャプテン。

「円堂。悪ノリし過ぎだ」

「そうか？良いだろ？偶には」

「でもテンション上がるのは分かりますよ」

「だろ？やっぱりテンション上がるよなあ」

「ふっ。夜桜も円堂の影響を受けてきたか？」

「はははっ。まだそこまですよ鬼道さん」

にしてもすごい観客の数……知り合いも多数見られるし。

「……………あいつら見ているかな……………」

「どうしたでヤンスか？夜桜」

「もしかして緊張しているんツスカ？」

「そりゃあするだろ。この人数だけ？エキシビションマッチなのに

な」

「それだけサッカーが注目を集めるスポーツだということだろう」

「きつと、円堂のサッカーバカが日本中に伝染しているんだろうな」

「へへっ。何か褒められてる感じがするな」

「……あれ？今の褒め言葉だっけ？」

「雷門の……いや、日本の力を見せてやるか！」

「行くぞ皆！相手は世界だ！」

『おう！』

今回のフォーメーションは4―4―2。GKは勿論円堂さん。Dに風丸さん、壁山、オレ、土門さん。MFに少林寺、鬼道さん、一ノ瀬さん、マックスさん。FWに豪炎寺さんと染岡さんだ。

ピー！

雷門のキックオフで試合開始。ボールは染岡さんから一之瀬さん、そして豪炎寺さんへと渡る。途中でディフェンスに来ていたが……あっさり突破できた。向こうのレベルが低い？いや、ワザと抜かせた？

「ファイアトルネード！」

そんな疑問を余所に我らがエースストライカーのシュートが相手キーパー目掛け飛んでいく。

「なっ……！」

そのシュートをキーパーは指一本で止めてしまった。文字通り指一本でだ。

そしてボールは再び豪炎寺さんに。ミスキック？嫌違う。打つてこいと挑発している。

「円堂！」

鬼道さんがすかさず円堂さんと呼ぶ。円堂さんは相手ゴールまで駆け上がり、そして、

『イナズマブレイク！』

円堂さん、鬼道さん、豪炎寺さんの三人による連携シュート、イナズマブレイクを放った。

「嘘だろ……？」

それを相手キーパーは高く跳躍し、ボールを踏みつけることでシュートを止めてしまった。

あんなの見たことない……とか言う次元じゃない。あんなのでも止められてしまうのか。

ボールはキーパーから相手のキャプテンへ。

「戻って下さい！ 円堂さん！」

「ディフェンス！」

攻めてきているのは3人。FWの二人と相手のキャプテン。

「……っ!？」

ブロックに行くがあっさり突破される。早い、身体が一切追いつかなかった。

彼ら三人はオレらディフェンス陣を完全に遊んでいる。いつでもゴールを狙えるのにシュートを打とうとしない。何故だ？ 何故打とうとしない？

そう思っているとゴール前に円堂さんがたどり着く。まさか……！ あいつら円堂さんが戻るのを待っていた？

「フッ……」

次の瞬間、相手キャプテンの鋭いシュートがゴールに刺さった。

一切そのシュートに反応ができなかった。オレだけじゃない、円堂さんも、他のメンバースもそのシュートがシュートと認識できた頃には既にゴールに刺さっていたのだ。

「えっ?？」

『決まったあ！ 先制はスペインのバルセロナ・オーブだ！』

実況により再び現実を認識する。

「これが世界レベル……個人技だけじゃない。チームとしても次元が違う」

「ああ、まるでチーム全体が一つの生き物のようだ」

「だが、このまま終わるわけにはいかない。全力で行くぞ！」

『おうー！』

雷門ボールで試合再開。ボールは染岡さんから一ノ瀬さんへ。

「土門！ 夜桜！」

『おう！』

一ノ瀬さん、土門さんとの連携シュート。

『ザ・フェニックス』

元はオレでなく円堂さんだったが、円堂さんの代わりにこの技を打てるようにフットボールフロンティアの後練習していた。

「フンっ……！」

しかし、相手のキャプテン……クラリオによってはじかれる。そのボールを拾ったのは相手のFWであるルーサー。

「ザ・ウォール！」

壁山が必殺技を繰り出すもその壁を跳躍し、あっさり躲される。

そしてそのままシュート。先ほどと同じく円堂さんが一切反応できなかった。

ピ、ピーー

あれからもバルセロナ・オーブの猛攻を止めることが完全には出来ず5―0で前半終了した。

こちらは全員汗をかいて体力も消耗している中向こうは一切疲れた様子がない。

「凄え……これが世界……！なんて凄えんだ……！」

円堂さんの独り言。ただその中には諦めなどはなく熱意で溢れて

いる。

「皆！世界は強い！でも全力で行くぞっ！」

『おおっ！』

前半の最後の方、彼らの動きが少しずつだが見え始めた。

「次こそは……」

ピーー！

後半戦、バルセロナ・オーブのボールで試合再開。

相手はクラリオとルーサー、後もう一人のFWであるベルガモの三人だけで攻め上がってくる。ボールはクラリオが持っている。

「……っ！」

「ほう」

さつきまでについては行けなかったが何とか喰らい付けている。

「ならば」

しかし、隣を走ってきたベルガモとのワンツーで抜かれそのままシュート。ボールはゴールに刺さった。

「さつきよりはフェイントとか動きが見える……よし。次だ」

円堂さんもさつきよりはシュートが見え始めているようだ。本当に少しずつだが彼らのスピードに慣れてきている。

ただ、残念なのは彼らがまだ本気を出しているわけじゃないこと……か。

雷門ボールで試合再開。しかし、ボールはあっさり取られ攻められる。

「フンっ……」

そしてクラリオのシュート。……違う。

「今度こそーマジン・ザ・ハンド！」

円堂さんがマジンを呼び出すも……違う。さつきまで見てきたシュートと何かが違う。何か……そう、何かが違う。

「回転か！」

オレはゴールへとダッシュする。

あのシュートはマジン・ザ・ハンドじゃ止められない！

「うわあっ！」

一度は止まりそうになるボール。しかし、そのボールは再び激しく、さつきまでと別の回転の様子を見せる。

回転と言ったがあこのシュートは小さな風の渦……竜巻みたいなものでボールが覆われていた。そしてそれは誰かが触れることで軌道が変わるもの。パワーだけじゃ止められないシュート。

「させるかあー！」

円堂さんを弾き飛ばしボールはゴールに向かった。それを間一髪ではじき返すも、ルーサーがダイレクトで打ち返してくる。

「くっ……！」

そのシュートに触れられたのは一瞬で、弾き飛ばされゴールに刺さった。

「大丈夫か……夜桜」

「円堂さんこそ……」

円堂さんの手を借りて立ち上がる。

お互い疲れが見える……いや、オレたちだけじゃない。フィールドに出ているメンバー全員に共通して言えることだ。

監督はそれでもオレたちを交代させる素振りを見せない。きっと、このレベルを味合わせたいのだろう。

そして、気付けば12-0。全員が満身創痍で立っているのがやつの状態だ。

「俺たちでどうにかなる次元じゃない……！」

「クソッ……時間がない……！」

「このまま終わらせてたまるかよ……！」

思いは途切れていない。だが、時間もなし何より身体が動かない……くそっ。こんなこと初めてだ。

「クラリオ。まもなくタイムアップだ。このまま終わるのか？」

「なに？」

「ほらよ。見せてやったらどうだ？俺たちのレベルを」

「なるほど。それもいいな」

そう言っつてボールを持って少し下がるクラリオ。

軽くボールを蹴り上げ、何度か蹴り込む。すると、ボールはカット

されたダイヤモンドのようになってゆき……

「ダイヤモンドレイ」

一瞬だった。さつきまでと威力、スピード共に桁違いなシュートがオレたちのゴールに突き刺さった。

ゴールに刺さった衝撃の風圧で前に倒れ込む円堂さん。ボールは円堂さんの横に転がり――

「円堂さん……」

「円堂……」

――拾い上げようとするも力が入らず手からこぼれおちてしまった。

ピ、ピーー

試合終了のホイッスルが響き渡る。それと同時に足から力が抜けて倒れ込んでしまう。ははっ。情けないな……

「俺たちが……手も足も出ないとは……これが世界か」

「ですね……オレたちなんてまだまだでしたよ……」

「ははっ、はははっ！」

空を見上げると星空が。ははっ。今のオレたちと彼らでは天と地ほどの差があるな。

「日本のレベルはこの程度か」

「なんだと……うっ」

染岡さんが反論しようとするのを豪炎寺さんが止めている。

「わざわざ日本に来た意味はなかったな」

「しかし、悪いプレーではない。このチームはもつと伸びる」

「何年先のことやら」

「日本の戦士たちよ。現状では話にならないが今後の貴方たちの進化に期待する」

本当に話にならねえ……だろうな。

一方その頃の永世学園。

「これは予想外だったね」

「ああ。剣人たちが手も足も出ないとはな……」

「……………」

スツと無言で立ち上がるクララ。そのまま部屋に帰って行った。

「どうしたんだアイツ？」

「仕方ないだろ。剣人があそこまでやられたんだ」

「今は一人にさせてあげましょう」

部屋に戻ったクララ。彼女はそのままベッドへと飛び込む。

(あんなに剣人が齒が立たない姿を見て、胸が痛くなった。でも、同時にあんなに必死にもがく彼を、最後に無力感を感じている彼を見て凄く苛めたくなった)

「……………ああああ……………！」

(私はどうすればいいんだ……………！彼の健闘を称えて褒めたり慰めたりすればいいのか。どん底まで叩き落として心を折りにいけばいいのか。でも、こんなチャンスそう巡ってこないだろうし……………でも、攻撃するより今は味方になってあげたほうが……………！)

布団を抱きながらバタバタさせているクララ。

彼女は今、弱^愛つ^{して}ている剣人^をを慰めたいという優しさという名の感情と心の奥底から湧き上がる性欲という名の欲望の板挟みになっているのだ。

この日。彼女は葛藤と悩みに悩んだ末、

「……………よし。慰めて優しくしてから、心をへし折りに行こう」

上げて落とす。最悪の結論を出したのだった。

サッカー強化委員

「FF申請書……ですか？」

「ええ。そうよ」

雷門とバルセロナ・オーブの試合から少し経った頃。私たち永世学園のサッカー部はミーティングをしていた。

……まあ、このサッカー部はつい最近設立されてしかも元お日さま園のメンバーで構成（一人違うけど）。まあその一人……お父様の実の息子、吉良ヒロトさんは普段こういう会議には参加しないので、結果この寮のリビングで行っていた。

ちなみに顧問は瞳子先生なのでやはりこの場所でミーティングは問題なかった。

「そうね。簡単に説明しておくとか今後のサッカー部にはスポンサーが付くというのは前に説明したわね」

スポンサー制度……と呼ばれるものだった気がする。今後大きな大会に出るためには、サッカー部と契約してくれるスポンサーを探さなくちゃいけないらしい。

私たち永世学園のサッカー部はお父様の子会社がスポンサーとなってくれるが、他のサッカー部は躍起になっている。今後も企業の開催するサッカー大会の予定がほぼ毎週、全国で入っている。ウチみたいなどころ以外は皆そこで優勝を勝ち取りスポンサー契約をするようだ。

「じゃあ、これは……？」

「これは大きく二つの意味を持っているわ。一つは来年のフットボールフロンティアの申請書。そのままね」

「でも、気が早くないですか？」

「そうだけ。予選……って言ってもまだまだ先だろ」

「ええ。だからもう一つの意味は、サッカー強化委員が派遣先を選ぶのに使うのよ」

サッカー強化委員？聞き慣れない言葉だ。

「サッカー強化委員と言うのは現雷門サッカー部のことよ。サッカー

協会は、雷門中の選手たちを各地の学校のサッカー部に配属し、日本全体のレベルアップを図ろうとしているの」

「なるほど……」

「でもサッカー強化委員は全国の中学のサッカー部に一人派遣できるほど人数はいない。数多くのサッカー部の内派遣されるのは精々十数のサッカー部ね」

確かに。日本全国の中学校の数に対し、それをまかなうことは無理だ。現実味がなさ過ぎる。

「だからこの申請書を選考基準に使うのよ」

「つつてもどうせランダムとかだろ？」

「いいえ。話によると彼ら自身に派遣先は選ばせるらしいわ」

彼ら自身……？

「ここにPR文章ではないけどコメントを書く欄も設けられているわ。まあ、書く書かないは好きにきなさい。コメントに関しては縛りはないわ。以上でミーティング終了よ。タツヤ、代表者氏名はキャプテンである貴方の名前を書いといて」

そう言つて部屋に帰つていく瞳子姉さん。

「サッカー強化委員……ねえ」

「てかこんなの運だろ運」

風介と晴矢がそう言う……うーん。

「……剣人と一緒にサッカー出来るチャンス」

『あつ……！』

ボソツと言つてみたけど……え？なに？皆気付いていなかったの？サッカー強化委員？目的とか何とかそんなのどうでもいい。

私の目的はただ一つ。剣人捕獲……コホン。剣人引き入れしかない。それ以外の人なんていらな

い。「おい、気のせいかもしれないけど、アイツ。いつもより燃えてね？」

「ああ。あのやる気は見たことがないな」

「ほんと、剣人に関することだけのやる気はすごいよな」

「まあ、それも仕方ないことだろう」

「あーあ、剣人のやつ災難だな。あの女に目をつけられて」

「おいバカ。聞こえているぞ」

「はあ？前より距離あるし問題ねえって」

「聞こえてますけど？」

「学習能力がないのでしようか彼は。やれやれ呆れたものです。」

「……晴矢さん。何か意見はありますか？」

「皆考え込んでいますね……ただ、私もいい案は浮かんでいない。ここは一つ他人の力を借りましょうか。」

「ああ？そんなの『剣人来てくれー』とか『待つてるぞ！剣人！』とかでよくねえか」

「……………ツチ」

「舌打ち!?ため息じゃなくて舌打ちかよ!」

「……………これだから頭の中も外もお花畑は」

「なっ…………」

「いいですか？頭にチューリップを咲かせている脳内お花畑さん。その程度の発想10あるサッカー部の内9つはやってきますよ？ねえ分かってます？剣人は人気物件なんですよ？分かります？貴方の発想は安直なんですよ？お子様でもそんなことやりませんよ……………はあ、この程度にしておきましょうか。今はチューリップの世話をしている場合じゃありません。剣人捕縛作戦を進めましょう」

「お、俺は…………」

「ああ、晴矢さんは必要ないですので、どうぞ。チューリップが少しでもましになるように水やりでもしてきてください」

「ちくしよおおおおおおお！」

「晴矢あ!」

チューリップ……………いえ、晴矢が飛び出していきましたね。まあ、期待なんてしていませんでしたが。

(あのバカ……………言わんこつちやない)

(どうする……………今口を開けば……………)

(あの毒舌の餌食に……………よし黙ろう)

急に静かになりましたね。後、男性陣が誰も目を合わせようとしてくれないですね。

「ふっ。何をバカなことを考えている」

と、ここで口を開いたのは治ですか。まあいいでしょう。

「……バカなこと……ですか?」

「ああ。我らが親友、夜桜剣人ならば!こんなことしなくとも間違いないく来るに決まっているだろー!」

(あ、アイツ終わったな)

「……………ハア」

頭を抱えるしかありません。

「そんなことは知っています。私が考えているのは99%来てくれるこの状況でいかに100%来るように仕向けられるかと言うことです。お分かりオサム?貴方の発想はあのチューリップ以下ですよ?もう一度言いましょうか?あのチューリップ以下ですよ?やれやれ。だからこの前も一人でフットボールフロンティア決勝ごっこを妄想して叫ぶことができるんですよ?」

「ぐふっ……な、何故それを……!」

「今必要なのは貴方の熱血精神じゃない。貴方の頭よ。……………まあ、どうやら使い物にならないようだけど……………少しでも期待した私がバカだった」

「……………すまん。ちよつと部屋に戻る」

丸くなった背中とはとてもゴールを任せられるとは思えない。一層のこと私がやった方がいいんじゃないかな?

(あーあ、今のはへこむだろうなあ……………)

(特に最後のボソツつと言ったアレは傷つくよな……………)

(狙われる前に帰りたい)

「私から一ついいか?」

「……………お願いします。玲名」

(この状況で意見出せるか普通?)

(三人目の被害者だな)

(ありがとう。今まで楽しかった)

「いや、普通に考えて……………脅せばいいんじゃないか?」

(普通に考えて最低の発想だろっ!?)

「……なるほど……採用」

（（いいのかよっ!?!））

それは盲点だった。そうか。何も普通じゃなくていいんだ。剣人を引き入れれば勝ちなんだ。

「ただ私にはその先が考えられなくてな……」

「……確かにそうですね」

明らかな脅しでははじかれる可能性がある。しかも剣人には脅しだと伝わるようなうまい具合の文章を考えなくてはならない。

「タツヤ！ウチの女性陣は何であんなにアレなんだ!?!」

「剣人……帰ってきたら死ぬんじゃないかな」

「でも帰ってこなかったら俺らが……」

ふむ……。ここは頭数を増やしましょう。

「キャプテン。それにリュウジさんと風介さん。何かいい案はありませんか?」

「やばい。どうする?」

「ごめん剣人。恨むなら恨んでくれ」

「三人寄れば文殊の知恵だよ。なんとかして切り抜けるんだこのピンチを」

この後、話し合った結果なかなかいいものが出来ました。これなら問題ないはずですね。

剣人の選ぶ道

雷門中がバルセロナ・オーブに負けてから日本の中学サッカーは大きく動き始めた。

オレたち雷門の選手が大きく関わるのは強化委員制度ぐらいだろうか。

日本の中学サッカー全体のレベルアップという名目で行われるもので、オレたちはそれに賛同した。

既に一ノ瀬さんと土門さんがアメリカに飛び立ち武者修行。ただし、今後日本に帰ってくるかは未定だそうだ。……それっていいのか？まあ、もう飛び立った後だしっか。

後は夏未さんが世界の選手たちの情報を集めるために旅立った。

この強化委員制度は選手だけでなくマネージャーたちや響木監督も影響しているらしい。まあ、音無さんは鬼道さんに着いていくだろうし、木野さんも円堂さん辺りに着いていくからマネージャーだけ派遣ということはなさそうだ。

「本日、君たちを呼んだのは他でもない」

とは言え今は誰も派遣先を決めていない。正確には派遣先となる候補の中学校をまだ知らされていないから決定できないというべきか。

「現段階でこれだけの数の申請書が集まってきた」

見せられるのは机の上に置かれた紙の束。……うわあ……。しかも一つじゃない……。わあ。

「理事長……これ全部が候補ですか？」

「いかにも。君たちにはこの中から自分の行く学校を決めてもらう。ただ、安心したまえ。今日一日で決めろというのも酷な話だ。猶予は一ヶ月。書類だけで足りないなら試合とかの資料を取り寄せたり実際に視察に行くことも可能だ」

猶予は一ヶ月……。短いのか長いのか。ただ、こんだけ候補があったらそりゃあ長めにとらないとな。しかも、こっちは一時転校という形で向こうの学校に編入するんだ。簡単には決められないよな。

「理事長。この山は？」

よく見るといくつかの山に分かれているが……円堂さん宛？

「うむ。こちらでざっと目を通して、コメント欄に君たちの誰かを指名するようなものがあればそれを分けてある」

本当だ。豪炎寺さんや鬼道さんの山とかもある。

「やっぱり円堂さんや鬼道さん、豪炎寺さんは人気ですね……」

「何言ってるんだ夜桜。お前も充分多いだろ」

「それでヤンスよ。ぱつと見た感じ4番目に多いでヤンス」

「さすがツス！」

「ちよつと待ってください！」

と……ここで目金さんが声をあげた。

「何で僕の山はこんなに少ないんですか!？」

「いや、お前。大した活躍してないだろ」

「そうだそうだ」

「寧ろこんなに来ているだけいいじゃないか！」

「何で目金さんですら山があるのに俺のはないんですか!？」

「……俺もない」

全員が全員専用の山があるわけじゃない。当然と言えば当然だが……不思議だ。本当に何で目金さんには山が——と言っても10枚行くか行かないかくらいだが——あるのだろう？あの、予選でのオタク集団はともかく他は……何で？

「つて、よく見たら目金のところ、『パソコンの使い方をお教えください』とか『アニメについて語りましょう』とか、サッカーで書かれているわけじゃないじゃん」

「何のためのサッカー強化委員ですか!？」

本当だよ。ああ、そういう系で来ているのか。

「なんだ。あの目金さんの所に来ているのはそういうことか」

「確かに適任だよね」

「うらやましく思ってた」

つまり、サッカーの実力で見ているわけじゃないと。

「で、この二つの山が、コメント無記入のところと指名なしのところ

だ」

何となく指名なしのコメントも読んでみたい気がする。

「じゃあ、適当に見ていつてくれたまえ」

『へーい』

というわけで山がある人たちはその山の、その他は最後に言われた二つの山を探っている。

「何か……つまらないですね」

パラパラと見ているけどどこも似たり寄つたりのことを書かれて、何かこう……ビビツと来るものがない。

「ん？豪炎寺。お前はもう決めたのか？」

よく見ると、豪炎寺さんの手が進んでいない。

「ああ。木戸川清修に行こうと思っている。他の奴に指名がなかったらだけどな」

「そつか。木戸川清修に戻るのか……」

「じゃあ、鬼道さんは帝国学園ですか？」

「いいや。俺は帝国に戻るつもりはない。他のところに行くつもりだ」

「へえ。なんで？」

「今の帝国に俺が戻ってもそこまで価値を見出せない。だから別のところに行くつもりだ」

なるほど……行く意味かあ。

そんなことを考えながらも紙をパラパラと見ていく。うん。ダメだ。何にも惹かれるものがない。そつか、よく考えたら一緒のチームでプレーするわけだから、弱いところを補強しようと皆考えるか。

キーパーがいないところは円堂さんを、司令塔がいないところは鬼道さんを、ストライカーがいないところは豪炎寺さんをつて、感じで向こうも考えて指名しているんだよな……つまり、この束にはそういう打算的なものが多いか。

「そりゃあ、惹かれるものがないよな」

とは言え、どこを選ぶほうか……はあ。まあ、やっぱりあそこしかないな。でもあそこは前聞いたときサッカー部設立していないって話

だったし……。

「キャプテンたち！何かよく分からないコメントを見つけたでヤンス！」

「よく分からない？」

「はい、えーつと」

『○月×日20時より、お日さま園将来の夢朗読会を行います。』

(Y・Kさんの幼い頃の夢が明らかに?)』

このY・Kって誰のことですかね?」

……待て。今凄い気になるワードが出なかったか?

「○月×日って明日じゃないか」

いやそこじゃない。そこもだけどそこじゃない。

「少林寺。それ見せてくれないか？」

「はい。どうぞです」

学校名……永世学園。お日さま園……サッカー部のメンバーの名前……。

「……………」

「夜桜？」

あいつらかよおおおおおおおおおおおおっつ！！！！

「ど、どうした? 頭を抱えて……」

マズい。このY・Kって言うのはオレだ。 Yozakurakento 夜 桜 剣 人……つて

そうじゃねえ。お日さま園の頃の将来の夢だと? というかその時期の将来の夢なんて黒歴史確定じゃねえか!? マズいマズい……いや、もつとマズいのは——

「大丈夫か？」

——オレが何を書いたのか一切思い出せない点だ。

そう、思い出せるならまだいい。問題は、オレがそれに何を書いていたかが思い出せないこと。そもそも書いた記憶がないって時点でアウトに近いが……朗読会!? 人の黒歴史暴露大会の間違いじゃねえのか!?

「……………円堂さん」

「お、おう。なんだ？」

「……オレ、永世学園に行きます」

「それはいいぞ。皆もいいよな？」

頷いてくれる一同。ああ、よかった。

「そして凄い急ですが、明日にはここに行きます。ワガママ言ってるのは重々承知です。ですがすみません。行かなくちやいけないんです」

「お、おう……目が死んでいるけど……大丈夫か？」

「はい……」

ああ……どうしよう。

「何故だろう……誰かの術中にはまっている気がする」

一体誰が首謀者か……逝けば分かるか。

この後、がむしやらにボールを蹴っていた事を記す。

感動の再会（っぽい何か）

あれから、転入の手続きとかその他諸々を雷門理事長に投げておいた。まあ、最低限のことは流石にやっておいたけどね。

「しばらくのお別れ……つてどこか」

昨日はあれから雷門サッカー部全員で響木監督が経営している雷軒で食事。まあ、一ノ瀬さんと土門さんが旅立つ前日も皆で食っていたし……恒例行事かな？

ただ彼らとは今後も何度か連絡を取り合ったりするだろう。それにあくまで一時的な別れ。だから会えなくなるわけじゃないので寂しきはそこまでない。

「そろそろか」

「ああ」

オレを引き取った親戚……といったら他人行儀だが三人目の親父。一人目は勿論生みの親、二人目がお日さま園の園長。そう思うと色々とおあるんだな……。

「悪い。こんなワガママ言つて」

「フン」

雷門メンバーは一部の奴が自宅から通うのに厳しくなるから配属先の学校での寮に入ったりすることになる。だからサッカー部だけじゃなく家族ともしばらく別れる人も多い。と言つても帰つてこればいい話だが。

「お前が選んだ道だ。ただ、母さんと父さんにはしっかりと報告しておけよ」

「分かつてる。寄つていくつもりだ」

ピンポーン

「来たようだな」

「んじゃ、いってきます」

「頑張れよ」

荷物を持ってドアを開ける。そこには、

「久しぶりね。剣人」

「お久しぶりです。姉さん」

姉さん——永世学園サッカー部監督、吉良瞳子先生がいた。

「行きましようか」

「はい」

昨日の今日でわざわざ家までお迎えに来てくれるこの優しさ。感謝しかないな。

「聞いて驚いたわ。来るのはもっと先だと聞いていたのに」

「ええまあ。いろいろありましてね」

主犯は誰だろうか？許さん……とは思わないが、ちよつと気になるな。相手次第ではぶちのめすことも視野に入れよう。

「ただごめんなさい。あなたの部屋だけ用意できていないの。明日には用意できるから待つてちようだい」

「仕方ないですよ。連絡もらつて昨日の今日で部屋を用意しろつて無茶が過ぎますから」

まあ、誰かの部屋に転がり込むか、どつかで寝よう。そうすりゃいいいな。

「で、最初はおそこに寄つていくのね」

「はい。お願いします」

「寮への到着が遅くなるかもしれないけど」

「20時に間に合えばいいので大丈夫です」

(あ……やっぱり、そのせいで来たのね)

そして場所は移動し……

「……父さん。母さん」

オレは墓の前で手を合わせていた。オレには両親の記憶がない。物心つく前に別れてしまったからだ、

「……この一年いろいろあった」

円堂さんたちと出会つて、フットボールフロンティアを勝ち抜いて、優勝して。世界の強豪相手に惨敗して。

「……次来る時はもっと強くなってみせるから」

今度はあいつらと一緒に。

「……すいません。時間取らせましたね」

「気にしないでいいわ。行きましよう」

私としたことが完全に失策でした。

「……日付設定を早くしすぎた」

遅すぎても問題があつたでしょうが早過ぎても問題だった。

これでは剣人が見たときには時既に遅し……。

「……………」

「く、クララ?」

「……………」

この失敗は大きすぎる。かと言ってこれ以上手を打つことが出来ない。どうする? いや、どうしようもない。

「ダメだ。何も聞こえていないな」

「いや……よく話しかけられたな。昨日の惨状を見たばかりだろう?」

「俺だって嫌だわ!でも、ジャンケンで負けたからしようがねえだろ!?!」

「あの不機嫌オーラ、見ているだけで……嫌な汗が流れる」

「気のせいかもしれないんだが、さつきから寒くねえか?」

「アイツの周りだけ極寒地帯だぞ。気をつける。目を合わせようものなら視線だけで殺されるぞ」

ふっふっふっ。いいところに獲物が表れましたね。ちょうど良い。憂さ晴らしに狩らせて貰いましょうか。

『全員。リビングに今すぐ集合。繰り返します。今寮内にいる子たち。全員リビングに今すぐ集合』

と、ここで滅多に使われることない、寮内の放送器具が使われる。集合？まあいい。

「……狩るのはその後だ」

獲物がわざわざ増えてくれるんだ。それほどありがたいことはない。

……それにしても何の用だろう？全員集合なんて何かあったのかな？

「全員集まったようね」

まあ、もうすぐ20時だし、ほとんどの人が寮内で過ごしていたんだ。集まるのも早かっただろう。

「姉さん。いきなり集合って何かあったんですか？」

我らがキャプテン——タツヤが姉さんに質問をする。

サッカー部のキャプテンであり、この寮内の実質的なトップ。オサム？年上だけど彼にはリーダーシップの欠片もないから致し方ない。

「そうね。入ってきていいわよ」

電話越しの誰かに呼び掛ける姉さん。

「はあ……広いなあこのリビング」

そう言いながら入ってきたのは、

「剣人!？」

「よっ、久しぶり。皆」

剣人だった。私は彼の姿を見るなり、一目散に駆け出して行く。

「おっと……」

「……………おかえり。剣人」

「……………ただいま」

彼は私を優しく抱き締めてくれる……………ああ。何というか……………

(すげえ……………さつきまでの不機嫌オーラが消えた……………)

(あれ……?俺たち空気?)

(この平和が続けばいいんだけどなあ……)

「……とりあえず話したいから離れてくれな——」

「やだ」

「——じゃあ、このままでいつか」

(（いや、即答かよ!しかもいいのかよ!）)

「とりあえず、改めて。サッカー強化委員として本日付で派遣された夜桜剣人です……ってなんか堅苦しいなこれ」

(（主にクララのせいで最初から空気が台無しな気がする……）)

「今日からまたよろしくな。皆」

「ああ。歓迎するよ。剣人」

代表してタツヤと剣人が握手を交わす。

「でも、お前。確か、サッカー強化委員はもつと先に派遣されるんじゃないかったか?」

「ああ……そのことだが……」

左手でズボンの後ろポケットから折り畳まれた紙を出す。そして広げられたそれは……

「FF申請書のコピーか……?」

「ああ……というわけでオレの黒歴史暴露大会を阻止しに来た!」
『……………?』

堂々と宣言する剣人。んん?黒歴史……暴露大会……?

「……………いや……………え?」

私たち全員が首をかしげる。その様子に剣人は困惑している……いや、何なんだろうこの状況?私も分かんないや。

「いや……あの、ね?あれ?今日だろ?このお日さま園将来の夢朗読会ってやつ」

『ああ』

私を含めサッカー部員（一部を除く）がようやく思い出す。そうだった。剣人を釣る餌にそんなこと書いてたなあ。

「ああ〜ってどういう反応!?何その『あ、そんなの書いてたなあ』的な反応!」

その通りである。

「それ嘘だよ」

「……………え?」

理解ができないような顔をしている。あ、テレビ越しに見ていた爽やかさが大分崩れている。これはシャツターチャンスシャツターチャンス……………

「……………マジ?」

『うん』

私を抱きしめる手を緩め、そのまま膝から崩れ落ちている剣人。

「……………っ!」

わわっ。あ、あの剣人が……………私に跪いてくれている……………!ど、どうしよう……………!そんな急に……………物凄く……………

「おい!誰かあの女を止めろよ!」

「落ち着け晴矢。あんなに幸せそうなクララを見たことがあるか?」

「それはねえ……………って違うだろ!?!なんであの女は人の後頭部を踏んで幸せそうな顔ができるんだよ!?!」

「ドSだからだろ?何も問題はないだろう」

「問題しかないだろ!?!」

「落ち着けよ晴矢。アレはクララなりの愛情表現なんだよ」

「さつきまでと違いすぎだろ!?!誰が喜ぶんだよアレ!?!」

「お前」

「え……………晴矢?アンタまさか……………」

「おいおいおい!?!何か勘違いが……………!」

物凄く踏みつけない。というか踏みつけている。ああ、なんて足触りの良さ。これはちよつとくせになりそ——と、急に足の下の方から力を感じる。

「きゃっ……………」

思わずバランスを崩すが、

「……………誰だ……………!」

手を取って支えてくれる剣人。一瞬で立ち上がって私を助けてくれるなんて……………なんて優しい。

「……誰が主犯だあ！」

ピツ！（サッカー部員の男子全員が私を指差す音）

「……てへっ」

ばれちやったら仕方ない。うん。今私に指さしたやつ……明日覚えていろよ。

「はあ……」

あれ……？ため息をついて終わりなの？え？何か『やりやがったなこの野郎！』的な反応は？え？ないの？

「……バカ」

そう言っつて私の方を見て、私の頭の上に手を乗せる。

「そんなことしなくたってオレはお前のいるここしか選ばねえつての」

頬が熱くなる感覚がする。え？……え？……え？それつて……！

「なあ。あの二人つて何なんだ？」

「相思相愛」

「バカなのか!?クララの方はともかく何で剣人も!?さつき踏まれてただろアイツ!?!」

「きつと彼はMなんだよ。うん」

「それでいいのかタツヤ!?!」

「とういか茶番劇を見せられている気分だ。早く部屋に戻りたい」

「そうだね。解散宣言でもしようか」

「じゃあ、もう解散で——」

「その前に、一つ。剣人の部屋の準備ができていないから誰かの部屋に泊めてあげたいのだけど。誰か」

「はい」

即答する。この役目は誰にも譲れない。

「流石に男女が同じ部屋というのは……」

「大丈夫です」

「……まあいいわ。剣人はクララの部屋に泊まっていきなさい。以上。解散」

あーなんて幸せな世界なんだろう。でも、これで来てくれたし……

「なあ、剣人」

「なに？タツヤ」

「俺たちと風呂入らないか？久し振りにいろいろ話たいからさ」
「いいよ」

「ナイスですタツヤ。これで部屋の片付けができる。……いや、部屋の片付けはしていますよ。正確には……」

「……準備が出来る」

「……これで剣人は私のものになるはず。ふふふつ。」

弱みを握るために

この寮には大きな風呂が二つ。男子用と女子用が存在している。

だから風呂入るときというのは絶対に大浴場……と言ったら大袈裟だがここに来ないといけない。と一応説明は受けたが……

「広いなあ……本当に寮の風呂かよ」

「俺たちが同時に入っても問題ない広さだよ」

広さだけなら公衆浴場とそんなに変わらないのではないか？ここは寮の風呂だぞ？

シャワーを浴びて頭と身体を洗い流す。そして、湯に浸かる……

「いい湯だ……」

心地よい湯加減。これはリラックスできそうだ。

「こうしていると昔を思い出すなあ……」

お日さま園にいた頃は毎日のように皆と一緒に風呂に入っていた気がする。そう思うと今までは風呂の時間は一人で過ごしていたんだな。

「今まで一人で入るのが普通になっていたから新鮮だな」

「俺たちにとっちゃ新鮮さの欠片もないけどな」

「ああ。絶対誰かが居るからな」

「むしろ一人で入る方が新鮮だろうね」

今風呂場にいるのはオレを含めて六人。リュウジ、治、風介、晴矢、タツヤ……皆、久し振りに会ったけど凄い成長しているなあ。

「そうだ剣人。フットボールフロンティアのこと話してよ」

「いいよ。何聞きたい？」

「やはり決勝大会の感想だろ」

「いや、ざっくりしすぎだな……まあいいけど」

という感じでフットボールフロンティアでの出来事を答えられる範囲で応えていく……大抵の質問がインタビューだったりで応えたことがあったりした気がするがやはり直接聞くのは違うのか？

「来年のフットボールフロンティアは俺たちが優勝するぞ！なあ皆！」

「ああ。それに治にとっては最初で最後の大会だね」

「そっかー……治だけは来年で最後なのかあ」

「まだ設立したばっかなのに……治だけはもう終わりか」

「三日天下かな？」

「そもそも天下とってねえだろ」

治……ああ、そっか。治はともかく、円堂さんや鬼道さん、豪炎寺さんたちに取っても最後の大会になるんだ。

最後の大会だが、雷門として参加出来ないことは決定している。この道を選んだ時点で会うのは味方としてではなく対戦相手として……なのか。まだ一年……いや、もつと短い期間しか彼らとサッカーをできていないのになあ。

「でもよお。剣人が入ったからそこまで難しくないんじゃないか？」

「それはないよ。剣人と同じように雷門の人たちがそれぞれ別のチームに入ってくるんだ」

「どこも強くなってくる……か」

「なら俺たちは負けられないように強くなるだけだ」

油断はできない。オレたちサッカー強化委員が派遣されていないところだつて強くなってくる。きつと、去年よりも熾烈な争いになるだろう。

でもオレたちだつて負けてられない。この仲間たちと勝ち進みたい。

「そーいや剣人。一つ忠告しておく」

「忠告？」

「ああ……クララには気をつけろ」

「……………」

どうして気をつける必要があるのだろうか。

「そーだな」

「……………」

何故か全員のテンションが下がり、この風呂場の温度が下がったのではないかと錯覚させられるレベルだ。

一体、彼らに何があつたのだろうか？

「どうして?」

「いいか。あの女は人を痛めつけることに快樂を覚えるド変態のイカレ野郎だ」

なるほど。さっき、何故か後頭部踏まれていたのはそれか。

「大丈夫だよ」

「ふん。俺たちが何回心を折られたことか」

「そこは誇るところじゃないよ」

「でも剣人。大丈夫と言い切れる根拠はなんだい?」

「根拠? 特にないけど……あれだよ。オレは彼女のどんな姿を知っても好きでいられる自信があるよ」

『……………!!?』

一瞬の沈黙の後に皆驚いたような表情を見せる。え? 何かマズいこと言った?

「お前!? よく堂々と言えるな!」

「え? 普通じゃない?」

「はあ……変わったやつだな。お前」

「そうなのか?」

「恋は盲目って言うけどまさかここまで狂わせるとは……」

「俺たちは止めればいいのか押せばいいのか……分からんな」

「うーん。そうだね。剣人」

「なに?」

「俺たちは忠告したからね」

「おう」

(タツヤの奴。完全に逃げたな)

(それでいいのか……と言いたいがナイスだ)

(これで俺たちへの被害が減ればいいんだけど)

(よし。先輩として暖かい目で見守ろう)

「にしても、お前。何でアイツのことが好きなんだ?」

「え? うーん。クララって可愛いじゃん。だから——」

(—あ—だから好きになったと。案外単じゆ——)(—)

「——色んな顔を見たいんだよね。もちろん可愛くテンパるようなと

ころもだけど、絶対的な差に屈辱的な顔でこっちをにらみつけてほしいというか、あ、涙目だとなお嬉しい」

((——ん!?ん!?コイツまさか……!))

「まあ、アイツだと何というか……そそのものがあるんだよね。だからかな?」

あれ?何かおかしなこと言ったかな?皆固まっているけど?

まあ、後はクララを見ていると守ってあげたくなるんだよなあ。保護欲ってやつかな?

「お前……まさか……サディストじゃないよな?」

「あはは。そんなわけないじゃん」

「よかった。違っただ——」

「ただ、サディストを名乗っている人を屈服させるのは楽しいよ?」

((アウトオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!))

「じゃあ、そろそろあがるわ。のぼせそうだし」

立ち上がってそのまま脱衣所へ向かう。いやあ。話が盛り上がって珍しく長風呂だったなあ。

「なあ、タツヤ……もしかしてとんでもない奴が戻ってきたんじゃないかな?」

「ドSとドSは惹かれ合う運命にあるかもしれないね……」

「どうするんだ俺たち。明日から心が持たないぞ」

「いや、クララと剣人のドSのベクトルが違うからきつと大丈夫だ」

「結局二人ともドSなんだね……あー」

((終わったな……俺たち))

「……………」

風呂からあがった後はクララに案内され、彼女の部屋にやってきた。

「お邪魔しまーす」

女子の部屋に入る…………うん。初めての経験だから緊張するな。

コンッ

ん？何か足に当たった？

「悪い。何か蹴ったみた——」

そう言いながら蹴ったものを拾う。一体何を蹴ったんだろ——

カチャ（手錠）

——え？

「…………どうしたの？」

あはは。……………実は見てはいけないものを見てしまった気がするのだが。

「ごめん。これ落ちてたよ」

「…………拾ってくれてありがとう」

そうしてポケットに手錠を入れると、何故か代わりに別の物が落ちる。

コトツ（猿轡）

「…………あ」

「……………」

「…………見た？」

「……………見てない」

……………あはは。クララは可愛いなあ。そんなものをポケットに入れてるなんて。あはは…………。

あれ？もしかしてオレってやばい状況にあるのでは？

「…………とりあえず座って。お布団は姉さんが持ってきてくれてひいた

から」

そう言つて座布団が用意され、そこに座る。隣には既にオレの布団が用意されていた。その隣はベッドがあるみたいだ。

「……ちよつと出掛けてくる。10分は戻ってこないからね」

そう言うところかへ行つてしまうクララ。

「やてと……」

何して過ごそうか。そう思い、とりあえず部屋の中を見渡すことにする。

今、私は自分の部屋の前にいます。スマホのカメラを構えながらこっそりと部屋を覗いています。

私のこと頭おかしいと思つた人。夜道には気を付けてね。

まあ、なんでこんなことをしているのかという……

「……………」

剣人の弱みを握るためです。

どんな人間にも弱みの一つや二つあるもの。人を脅す——使つたりするのに手っ取り早い方法は弱みを握つて脅すこと。そうすれば簡単に従ってくれる。

もちろん、反抗心を生まないように調教することは必要不可欠ですが。

ただ、人というのはそういう脅迫弱みや黒歴史できるネタがあってもそう簡単に人には話さない。故に握るのは難しい。

だったら作ればいい。弱みが握れないなら相手の弱みをこつちが作って握ればいい。実に簡単で単純な話。

簡単だが慎重にならねばならない。相手が罠だと察知される前に仕留める必要がある。ベストは罠だと知られない事だが、まあ、罠だと知った頃にはすでに終わってるはずだから問題ない。

「……………」

なら、今回私が用いる罠は何か？単純である。

女子部屋に一人残された男子。

この状況だけで何もしなくても弱みは握れそうだがそこに一工夫加えてある。

僅かに開けられたクローゼット。

ベット下に微かに見える本のカバー。

机の上に置いてある日記と書かれたノート。

最初は耐えられるだろう。だが、私は10分は戻ってこないと宣言している。

このことにより少しずつ理性と罪悪感を消していき、好奇心を生む。

更に、手錠と猿轡という危険な私物を見せることで剣人側にも私の弱みを握るという考えを生ませる。そして、弱みを握るには絶好のもの（日記やベット下の本）が目に見える形である。

「……………勝った」

私は勝ちを確信した。

しかし10分後……。

……おかしい。

剣人を見張っているが一切動きがない。

「……………」

まあ、後10分もすればきつと動きがあるだろう。

さらに10分後……。

あれ？嘘。本当に動きがないんだけど……え？作戦失敗？

いやそもそも……起きているのかな？何か20分間見張っているけど、一切動きがない。最初こそキョロキョロと周りを見渡す動作があったもののそれ以降本当に動きがない。

「……………」

私は今帰ったと言わんばかりに部屋に入る。

「……………」

「……剣人？」

「……………」

え？この男。本当に寝てたの？

「悪い。ちょっと瞑想していた」

なるほど。瞑想ね。瞑想……瞑想……………」

「……………」

もしかしたら剣人ってバカなのかもしれない。いや、瞑想というか

形は凄い決まっていたんだけどね。

「ああ。そうだよな」

え？分かっててやったの？それって本当にただのバ——
「ここでやることなんて一つだよな」

——次の瞬間。私は剣人によって押し倒されていた。

（二応形だけでも）悲鳴を上げようとした時、私は——

「……これ。なーんだ？」

——私は笑顔を見せる彼の前に、敗北を確信したのだった。